瘋癲老人日記

――高齢者文学人生論

谷崎潤一郎（1886-1965）
『瘋癲老人日記』（1962）
参考：映画『瘋癲老人日記』（1962）
出演：老人　山村聡　　監督・脚本：木村恵吾
　　颯子　若尾文子　　撮影：宗川信夫
　　妻　　東山千栄子　音楽：小川寛興

生ニ執着スル気ハ少シモナイガ、生キテイル限リハ、異性ニ惹カレズニハイラレナイ

谷崎潤一郎の『瘋癲老人日記』は日記形式の小説で、もしかすると、永井荷風の日記『断腸亭日乗』を意識して書かれたパロディかもしれない。

「日記ヲ書クトイウコトハ、書クコト自身ニ興味ガアルカラ書クノデアル。誰ニ読マセタイタメデモナイ」という語り手の瘋癲老人はいう。

荷風の『断腸亭日乗』も書クコト自身ニ興味ガアルカラ書イタ日記のようだが、晩年になると評価が高まり、出版が約束されていた。読者に読ませるための日記といってもよい。

戦後の荷風は浅草のストリップ劇場通いがよく知られている。楽屋で裸の踊子たちと談笑し、エロっぽい寸劇の脚本を書き、自らも寸劇に出演したりと瘋癲老人ぶりを発揮したが、さすがに七十七歳になるとストリップ劇場通いをやめている。

すっかり枯れてしまったが、それにひきかえ、谷崎潤一郎の瘋癲老人は七十七歳でも懲りていない。「生ニ執着スル気ハ少シモナイガ、デモ生キテイル限リハ、異性ニ惹カレズニハイラレナイ。コノ気持ハ死ノ瞬間マデ続クト思ウ。九十ニナッテモ子ヲ生ンデミセルトイウ久原房之助ノヨウナ精力ハナク、スデニ全ク無能力者デハアルガ、ダカラトイッテイロイロノ変形的間接的方法デ性ノ魅力ヲ感ジルコトガデキル。現在ノ予ハソウイウ性欲的楽シミト食欲ノ楽シミトデ生キテイルヨウ

瘋癲老人日記

高齢者文学人生論

ナモノダ」。

要するに、瘋癲老人の楽しみは食欲と性欲だけという。食欲は冷奴を食べ過ぎて下痢をするし、性欲はすでに全くの無能力者だが、それでも美食を追及し、いろいろの変形的間接的方法で性の魅力を感じようとしている。

瘋癲老人は妻、息子夫婦、孫と同居しており、看護婦や運転手も雇っている。さらに嫁いだ娘が二人。荷風の孤独暮らしとはえらい違いだ。

元来健康な体質だった瘋癲老人も七十七歳で喜寿を祝ってから肉体的苦痛を訴えはじめる。最初に左の手から肘、次いで肘から肩、足から脚と日増しに運動の自由を欠くに至った。

彼は痛いときでも性欲は感じる。痛いときの方が一層感じる。あるいは痛い目にあわせてくれる異性により一層魅力を感じ、惹きつけられる。

老妻は別室で寝起きし、看護婦が老人と同じ部屋で寝ているが、瘋癲老人は妻や看護婦には性欲を感じない。彼が惹かれているのは、息子の嫁の颯子――踊子だった彼女の足は美しい。瘋癲老人の夢は颯子の足の裏の拓本で仏石足をつくり、その足に踏まれたまま永眠することだ。

谷崎潤一郎は七十九歳で腎不全に尿毒症を併発して他界した。最晩年の暮らしぶりはほぼ瘋癲老人の通りだったと伝えられている。

梅が香にめざしを干してゐたりけり　潤一郎